A.Ｉの世界

防犯きゃめら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａ．Ｉの世界

【Ｎコード】
Ｎ７２３１Ｆ

【作者名】
防犯きゃめら

【あらすじ】
その日、世界は停止した。世界滅亡まで後数年。それを知った人類は地上を捨て、はるか上空へと逃げ出した。「松王子」それが人が造りし新天地の総称であった。
きっかけは、松王子の一つ、高層都市『玉城』の周辺都市を巻き込んだ大爆発。
始まりは一つの携帯端末。
一人の少年と、一人のナビゲーションキャラクターが織り成す物語

序章

A・Ⅰ（アイ）の世界
序章

西暦２０４７年

男は高層ビル最上階近くにいた。
眠らない都市、深夜になろうとも都市は眠らない。ネオンの光で薄く光る街はまるで暗闇に光星々のよう。
厚い雲に覆われ夜空を見ることが叶わなくなった現在で、唯一見ることが出来る星空であった。
だがしかし、それもつい一年ほど前までの事だ。
環境の著しい悪化により、都市連合政府によって打ち出された新しい計画。

『エデン計画』

数年前の事だった。
どこぞの偉い科学者達が、人類はあと数十年もすれば地上で住む事は出来なくなると発表した。混乱する世界の中、日本は都市連合が――既に三十年近く前に無くなった日本政府の変わりに、新たに生まれた都市国家。都市国家間による抗争も既に収束をみせた。今は二十の都市国家間で作られた、都市連合が日本の統治を行っている――初めて打ち出したプロジェクトが、この『エデン計画』
それは雲をも越す高さに巨大都市を建造するという、途方も無いものだった。

計画が決定され、初期段階として十二都市の建造が決定された。
その一つ『玉城（たまき）』それがこの街のそばに建設される事になった、高層都市の名前である。

男はため息をついた。
男の住む街の高層ビルから見える街の夜景は、数年前まで男にとって正に宝であった。だがその宝は、昼夜問わず行われる高層都市建設作業のため、煌々と照らされるライトによって、全て台無しにされていた。
建造場所はとうに山の高さを超え、今は晴れることの無い雲に覆われ伺うことの出来ない位置であるにも関わらずにだ。

男の住む街と、『玉城』とは実質車で数時間もかかる場所距離にあり、決して近いわけではない。だがそれでも建設地からの光で街に昼夜問わず照らされ、また日々大きくなる都市に対しての得も言われぬ圧迫感は、街の住人にとって明らかな公害だった。

あまりの明るさの為、睡眠妨害になると言った苦情もあったようだが、この街に住む住人は優先的に『玉城』への居住権が与えられる。それは多少の苦痛を我慢してでも魅力的なものであった。たとえ数年間昼夜問わずライトで照らされ続けてもだ。

男は『玉城』を睨めつけるように見た。
自分から宝を奪ったあれが憎かった。だがあそこに住む権利は欲しい。日本の人口に対して、現在建造中の十二の都市では全て賄えない。必然的に第二期都市建造に回される人間が出るのだ。
灰色の雲によって空が見えなくなって十数年。地上はもう長くないように思えた。

男は再びため息をついた。今度は諦めのため息であった。

今男が何を思おうと、結局あの都市に頼るしかないのだ。そう考えると他者と同様、男も今の現状を我慢するしか無いのだった。

巨大都市は、一様にキノコの様な形をしている。

玉城はもっとも早くに建造が開始された都市であった。

キノコに例えるならば、既に幹である基礎部分は出来上がり、今現在実際に人が生活ための居住地域である、傘部分を建造している所だった。

男の位置からでは玉城の傘は見えない。傘は雲の上に作られるからだ。

だがしかし、夜になると時より雲の薄い部分から傘の光が漏れる事があった。

だから男は、一瞬、雲に走った光をライトの光だと思った。

光は断続的に雲をオレンジ色に染め上げる。

男は思った。

やけに今日は光が通る。雲が薄いのであろうか？　だがしかし、ライトの色はオレンジでは無く、白ではなかったであろうか？

そんな思考も、次の瞬間に突如男を襲った暴力によって脳内から吹き飛ぶ事となる。

それは一瞬の事であった。

ビルを揺らす強烈な揺れが男を襲った。ガラスが一瞬にしてはじけ飛ぶ。部屋の中央にいた男は咄嗟に両腕で顔を庇った。

ビルのガラスを突き破った風が、ガラスの破片と共に身体へ突き刺さる。男は暴風によって部屋の端へと吹き飛ばされた。

男が気が付いたのは、暴風が男を襲ってから数分もしないうちだった。

身体の至る所がガラス片によって裂け、血が流れ出している。咄嗟に顔を庇った右腕には大小沢山のガラスが突き刺さっていた。

男は這うようにして何とか窓際まで移動した。何故か空を見なければいけない。そんな気がしたのだ。

ビルの明かりは全て消えていた。男の居るビルだけでは無い。男の好きだった人工の星空はその姿を完全に消失させ、地上は漆黒が支配していたていた。

だが代わりに、空には美しく輝く、優しい自然の星空が広がっていた。

これまで十数年間地上を覆い隠していた雲が吹き飛とばされ、変わりに十年ぶりに夜空が地上に顔を覗かせていた。

雲は玉城を中心に半径十キロ辺りまで円形に吹き飛ばされ、夜空と雲の境目には壮観な絶壁が築かれていた。

それはまるで、暗闇に包まれた洞窟に唯一光を届かせる。だが決して届くことのない割れ目のようだと。男は思った。

そして十数年ぶりにみる星空に、男は意識すること無く涙を流していた。

満天の星空の中、空の一部分に漆黒が有ることに男は気が付いた。そしてそれが建設途中であった『玉城』だと男は直ぐに気が付いた。

絶壁の中央にそびえ立つ高層都市『玉城』そのあまりの巨大さに、男は息を飲んだ。

キノコに似たその形。傘の部分には以前都市開発関係者から聞いた話では、最終的に大気から人を守るために特殊なシールドを貼るという。だが今の『玉城』は未完成の為か、完成予想図と違い未だ傘の部分が平だった。

そこに、一つ、紅く光る星があった。

夜空に紅く光る星。だがそれは明けの明星よりも明るく、紅かった。

星にしては明るすぎるそれは始め、建設現場のライトかと思われた。だがそれは、数度と脈動するかのように紅く、強く数度と輝くと、ゆっくりと都市上空へと昇ってゆく。

紅き星がさらに数度脈動をみせたその直後、星が爆発した。

男は星が爆発した瞬間、襲い来る衝撃波と熱風によってビルもろとも吹き飛び意識を刈り取られた。

男の瞳に最後に写ったのは、両翼を大きく広げ、今にも飛び立たんとする炎の化身だった。

この日、世界、あるいはもっと大きなものを巻き込んだ歯車が長い年月を得て、再び動き出した。

朝のある世界

「中東諸国最大規模のテロ組織、「ｚｉｌｚａ」が拠点としていると思われる地域に対して先週同時攻撃を開始したＡＵＮ（先国連）ですが、その際新型対人兵器ＵＷ－６５を今回初めて実戦投入したと発表しました。
ＵＷ－６５は日本ジェノア支部による設計、開発兵器で、全長８０センチメートルほどの比較的小さな兵器です。」

画面に映し出された物体は、ボーリング玉の天辺に竹トンボを突き刺して、一昔前のＵＦＯキャッチャーの様な手を無造作に取り付けたような、そんな一見すると玩具にも見えなくもない物だった。だが、その玩具の様な手には人間を無造作に、正確に破壊するための兵器が取り付けられていた。
「こちらの映像をご覧の通り、カメラを中心に丸い形をしており、自在に空中を滑空して敵を探し出し、左右に取り付けられた武器で攻撃します。
ＵＷ－６５の新規導入により、これまでのＨＭ－８３は順次撤退。製造元のヒューゴ社は無人兵器開発からの撤退を表明しました。これにより無人兵器開発はジェノア社に完全に一任されることとなり、これによる日本経済の影響は――

テレビから流れでる音を意識する事無く聞き流しながら、僕は朝食を取っていた。

「いやな世の中になったよね。兵器売って私たちの生活楽になりますよ～だって」
そう言って、少ししかめっ面をしながらテレビを見ているのは香（かおる）今年大学に進学した僕の３つ年上の姉だ。

「香、仕方がないじゃないか。実際に兵器を売って今の暮らしが出来てるんだから、この国は」

「そうだけどさあ。でも人を殺す武器を売っていい暮らししてもね。何かいい気がしないって言うか。それより！　むぅ！　咲(さく)、お姉ちゃんのこと香ってよんだ！　ちゃんとお姉さまって呼びなさい。それか香ちゃんでもＯＫだよ！」

そう言って香は一瞬怒ったように頬をふくらませて見せたものの、すぐに笑顔になって僕にとんでもない呼ばせ方をさせようした。

「いやいや香、香ちゃんって。もうそんな年でもないだろうに」

「あぁ！？　何か言った？」

怖い！めちゃくちゃ怖いです。顔、顔が般若になってます！なんか角と牙が見え隠れしてるんですけど！！！

「ご、ごめんなさい！香……お姉さま」

「ん？香お姉さま……。ふむ、ふむふむ」

何か考えだす香。いや咄嗟にお姉さまなんて言っちゃったけど、どうよ、実の姉にお姉さまって。

「いいわね！それでいきましょう」

般若の形相から一変、次は満面の笑みを浮かべて僕を見る香。もとい、香お姉さま。

どうやら実の弟に、自分を様呼ばわりさせることにしたようだ。
しかし僕もここで引き下がるわけにはいかない。そうでないと一生僕は自分の姉をお姉さまと呼び続けなくてはいけなくなる。

「さっきは咄嗟に言っちゃったけど、お姉さまって実の弟に言わす言葉じゃないだろ。香」
言った瞬間、物凄い形相で睨まれた。

「いいわね、咲？」

「…はい」

我が家を支配している姉には逆らえない咲であった。

「――次のニュースです。今話題になっている携帯端末。ＭＡＸＩＭＵＭがついに今日発売されました。」

家を最後に出るのは僕だ。その事に大した意味はない。
ただ単に僕の行く高校が一番近くにあって、父親が仕事の関係上帰ってくる事も少なく、母親が三年前に死んでしまっただけのことだ。

香は早いうちに朝ごはんを食べると、早々に家を出る準備をした。
香はゲームしか特技のない僕とは違って頭が良い。大学で既に研究チームに入り、何かの研究をしているらしかった。

前に一度何の研究をしているか聞いたことがあった。その答えは「新しいエネルギーを研究しているの。このエネルギー研究がもっと進めば、今みたいにエネルギーに困ることもなくなるんだよ。それに母さんの研究でもあったしね」との事だった。
母さんと香が何の研究をしているのか、僕は知らない。だけど母さんが研究所で死んでしまった事もあって、僕は香にはあまりそういった事をして欲しくは無かった。
それに、その時の香の何かに耐えるような表情が僕には見ていて悲しかった。

研究が有るため、香が家を出る時間は僕よりも随分と早い。僕が朝ごはんを食べ終わる時には香は家を出ようとしていた。

「咲。それじゃお姉ちゃん大学行ってくるから、前みたいに学校サボらないで咲もちゃんと行くのよ！」

そう言って靴を履いた香は、玄関越しに僕に釘を刺した。

「サボらないよ」

「嘘。前に一回サボったじゃない」

「今日はちゃんと行くって」

「ホントかなぁ？前もそう言いいながら、学校から電話がかかってきたんだよ？お宅の弟さんがまだ出席してませんけど、体調不良ですか？って」

「な…！」

さすがにこれには驚いた。まさか香と担任の輝夫が裏で繋がっていたとは……。

「ふふ～ん。驚いた？実は咲の担任先生とは親しい関係なのだ！だから咲が学校に来てないと直にお姉ちゃんの所に連絡が来るんだから。まあ前回のは多目にみてあげて、体調不良って事にしてあげたけど。これ以上学校サボる用だったらそれなりのことを覚悟しなさい」

なるほど、サボったのに輝夫が何も言わないな。と思っていたけど、香が上手いこと言ってくれていたのか。

輝夫はクラスの担任だ。

「ああ、わかったよ。これからはなるべく学校に行くようにする。それと、前回は上手いこと言ってくれてありがとう」

「ふふ～ん。それでよろしい。お姉さまを敬い讃えなさい！」

そんな姉を苦笑交じりで見送る咲だった。

携帯端末（前書き）

投稿が遅くなりました。が、多分今のままのペースになるかと思います…。もっと早くお話を書けるようになりたいです！

携帯端末

二章　端末

学校といっても、昔のように毎日通う必要はない。月始めと、週に二回好きな日に学校に来ればいいだけなのだ。かといって他の日に学校が無いというわけでも無い。

大概の生徒は週二回学校に行くと、後は自宅で自分の端末から授業を受けている。自宅にいても端末から授業を受ければ出席したことになる。

僕はというと、学校の生徒で唯一毎日登校していたりする。それは、僕は学校が大好きで、毎日行きたくて行きたくてたまらない！のではなく、あまりにもサボりすぎて出席日数が足りない。なんて事でもない。ただ端に携帯端末を持っていないだけだ。

一様携帯電話は持ってはいるのだが、今時こんな物旧石器時代の遺物か！と連司に言われた事もある。さすがにそれは言い過ぎだとは思う。けど、今年中、後三か月で日本中の携帯電話が使用できなくなるのも事実だ。今はもう携帯電話もＰＣも、買い物からテレビ、ペットの世話まで全ては携帯端末一つで済む時代なのだ。

そんな中まだ端末の一つも持たない僕は、日本中からみてもかなりの異端なのだと自分でも思う。学校の授業は貸出用の端末を借りて、家では香の端末を使って事を済ましていた。
それでも外出時などは時々困ったりもするけど、機械音痴な僕としては新しく端末を買うつもりはなかったりする。連司や美琴は買えかえって煩いけど…。

家を出てから近場の駅まで5分。そこから街全体をグルリと一周しているリニアに乗って5分、徒歩3分の所に学校はある。

「おはよー。」

教室に入って適当に挨拶をすると、自分の席へ向かう。今日は大体全体の1／3ぐらいが学校に来ているようだった。自宅から授業を受けている奴らは教室の一番後ろ、巨大なパネルに顔がデカデカと映し出されている。端末のカメラ機能で向こうの様子もこちらに映るのだ。その映し出される映像は自宅だからって好き勝手し放題で、今起きたって顔をしている奴や、授業が終わったら何処かへ出かけるのか画面の端で化粧を塗りたくっている奴、まだ起きていないのかパネルに映像が映っていない奴など様々だ。

「おう、咲おはよ～」

ふいに後ろのパネルを見ていた僕に対して前の席から声がかけられた。振り向いた先、そこには僕の親友の面が超至近距離、顔と顔まで後15cmの所にあった。

「うわあ、近い！キモイ！」

目の前には金髪、老け顔、銀縁眼鏡のド・アップ。堪らず咄嗟に両手を突き出して連司の顔を押し返す。

「うわ、いててて、いてええ。おお、うおおおお！」

押し返された連司の顔は、そのまま体の中心から後ろへ、バラン

スを崩した身体はエビのように反り返った後、机やら椅子やらを巻き込んで豪快に背中から床へと落ちて行った。

「いってええ、何すんだよ咲。折角親友であるこの村上連司様が朝の挨拶に来てやったのに」

そう言って僕を睨みつけてくる金髪、老け顔、銀縁眼鏡といった酷くアンバランスな親友。
銀縁眼鏡ってなんだよ。

「連司どうしたんだその眼鏡いつもはコンタクトだろ？　どうして今日は眼鏡なんだ？」

中学校までの連司は、黒髪で銀縁眼鏡といった勉強の良く出来そうな秀才君。それが連司の第一印象だった。なのに、どこをどう間違ったのか、高校に入って早々髪は金髪、眼鏡はやめてコンタクトに変え、秀才から反転悪ガキっぽくなってしまっていた。そう、あくまで悪ガキだ。決して不良などに見えはしない。

「ん？　ああ、コンタクトの注文するの忘れててよ、届くのが今日なんだ。だから今日一日は眼鏡ってわけ。でも度が合わなくてな、見えづらいんだ」

ああ、なるほど。ずぼらな連司らしい回答だ。もし真面目に、これから金髪銀縁眼鏡でいくぜ！なんて言われたら、どうして頭の構造を変えてやろうかと思うところだった。

「そんな事よりよ。今日は何の日か知ってるか？」

「今日？」

今日は何か特別な日だっただろうか？

「今日は何か特別な日だっけ？」

僕には連司の言う《特別な日》が何なのかわからない。

僕がそう言うと、連司はさも驚いたように、そして呆れたような顔をした。

「お前普段からテレビとか観ないわけ？　今日は新型携帯端末が出るって日本中で話題なのに」

新型携帯端末。そう言えばそんな事を朝のニュースでやっていたような気がする。

「あ～そんな事ニュースで言っていたな。でもなんでそんなに話題になるんだ？新しい端末なんて次から次に出ているじゃないか」

僕がそう言うと、連司は一つ溜息をついた。ちょっと大袈裟すぎだろ今の溜息……。

「……お前本当に何も知らないんだな。今度新しく出る携帯端末は、ジェノア社の開発なんだよ。今度の携帯端末でついに端末産業にも乗り出したってわけだ」

今の端末産業は、会社同士の潰し合いだと言っても良いぐらいに凄いことになっているらしい。らしいと言うのは全て前に連司から聞いたことだからだ。

世の中、特に技術の進む日本において、財布を持たなくなったのはつい最近の事ではない。今はほぼ全ての事が端末一つで出来てしまう時代。そんな時代だからこそ、端末業界は長い間、火が着いたように熱くなっている。そこに世界一の大企業、ジェノア社が介入してくるのだ。噂がたつのも判る。

「なるほど、それは確かに話題になるわけだ」

僕がそう言うと、前の席でこちらを向いて頷く連司。

「発売元がジェノア社だから、競争の激しい端末産業への進出にみんな期待しているんだよ。いくらジェノア社だとしても、今から端末産業に入り込むのにはかなり無理がある。なんたって携帯電話が普及した頃からの会社や、他の都市国家からの介入だってあるからな。それなのにジェノア社は端末産業に乗り出した。と言うことは、ユーザーが欲しがるような何か新しい技術があるのかもしれない。あるならきっと凄い技術に違いない！と、まあこんな具合に世間が盛り上がっちゃったってわけだ」

「へー。そうだったのか。全然知らなかった」

連司もその一人なわけだ……。なんて思ったりもしたが、本人には言わないことにした。

「知らなかったってねえ。確かあなたのお父さんがＭＡＸＩＭＵＭの開発者だったはずよ。開発者の息子が存在自体知らなかったなんて」

凛とした良く通る声が、隣の席から僕に向かって掛けられた。

「おう、美琴じゃないか。おはよ」

いつの間に登校したのか、僕の隣の席に嘉保美琴（かほうみこと）が座っていた。キリっとした顔立ちに、鋭い眼光。初めて彼女を見た人は、自分が嘉保家のご令嬢に睨まれていると勘違いし皆恐縮するという。眼だけは鋭い彼女だが、特に美人といったわけではない。本当はごく普通の女の子なのだ。彼女の事を知らない人たちは、その名前と瞳で彼女を特別扱いしてしまう。彼女は僕たちといる時以外いつも一人のようだった。

美琴（みこと）は嘉保家のご息女様だ。

美琴の父である嘉保幸則は日本農業の約六割を担う大企業の社長だったりする。

今から二十年ほど前、当時日本の農業力の低下に危機感を持った嘉保幸則は、当時日本に進出してきたばかりで日本と関係を深く求めていたジェノア社日本支部と積極的に共同。ジェノア社としても、日本の他の企業と早く関係を持つ切っ掛けになるとして協力を惜しまなかったという。

実際の所、既に社会は破綻し、政府機関の影響力が日に日に弱くなる中で、その影響力を日本にも伸ばしたかったのだろう。

そのジェノア社の膨大な資金で減少していた全国の農地と労働力を雇い、当時新天地として建造されていた松旺子（松王子）の地下に巨大な農業プラントを造ってしまった。それが大成功。三年前のテロで地上は壊滅し、地上にあった地下プラントが使えなくなってしまったらしいが、都市の地下作ったプラントを拡大させる事で難を得たとか。

美琴曰く、ジェノア社の金で、ボロ事務所でしかなかった嘉保フ

ァームも今では名前を嘉保コンツェルンに変え、１４０階建ての立派なビルが本社。だそうだ。

「コンツェルンってねえ。そのまんまじゃないの。今時社名にコンツェルンって。どんな名前のセンスしてるのよ、うちのオヤジは」

前に美琴が言っていた事だ。可哀想に美琴のお父さん、娘にあなたのネーミングセンスぼろ糞ですよ……。

そう、世界は一度崩壊した。今からほんの少し前の事だ。

生き残った日本人一千万人は今、雲の上に建造された超高層都市で暮らしている。

学校は月初め以外、基本的に席は自由だ。だから昔から仲の良かった僕と連司と美琴は学校で会う時はいつも自然と近くの席に座っていた。

「そんな事言われてもな。俺、親父の仕事に興味ないから。それに親父滅多に帰って来ないから話もあまりしない」

「咲のお父さんジェノア社開発部の責任者だったよな。最近はＭＡＸＩＭＵＭの開発で色々大変だったのかな？」

「だろうな、ここ数カ月ろくに家に帰って来なかったから、何か造っているのだろうなとは思っていたけど、別に親父が何を作っているかなんて興味ない」

親父は自分の研究の事となると、それにのめり込んで回りの見えなくなる人だった。母親も親父と同じく研究員で、親父の手伝いをするのが仕事だった。

そのせいで二人とも家に帰ってくる事も少なく、昔は姉と寂しく二人で毎日過ごしていた。今こそ如何とも思わないものの、僕が小さかった頃は親父が母を独占していたことが我慢ならなくて、母が僕の相手をしてくれなかったのが悔しくて、よく癇癪を起しては姉を困らせていた。

そのせいなのか、僕は親父の研究や新しく出る製品など、そんなものに一切興味を持たなくなっていた。

「せめて自分の父親が何をしているかぐらい知っておきなさいよ」

「そんな事いわれてもな。まあ今度帰ってきた時にでも聞いてみるよ」

美琴に対して曖昧に返事する事でこの会話をかわす事にした。

「駄目よ！今日会いに行って話しなさい。ついでに端末も新しく買いなさい。息子が父親の製品使わなくてどうするの！」

……見事に失敗、てか！何故か逆に僕が親父に会いに行く展開になってますけど！？

「ええ！何でそんな事になってるんだよ！それに会いに行くったっ

て、ジェノア社のある燈夜(ヒヨス)朱都市に行くリニアの予約は学校終わってからじゃ取れないぞ」

3年前のテロ以降、人々は日本に合計11個の巨大な都市を作り、そこで暮らし始めた。

もともと別の土地で同時に進んでいた都市開発を利用した街のため、都市は日本各地に点在する。交通手段は飛行機か、唯一都市同士を結ぶリニアを利用するしかないのだが、飛行機を利用するのはいささか値が張るので一般人はあまり利用しない。そのため、庶民にとって唯一とも言ってもいい他の都市への交通手段という事もあって、あらかじめ予約するか特別なパスを持った人でないと利用する事が出来ない。そしてその予約の締め切りは遅くても前日の午前中までだった。

「ふっふっふッ」

何なんだあの美琴の笑いは。僕は何も変んな事は言っていないはずだが……。

僕のそんな疑問に答えるかのように、美琴は言った。

「私を誰だと思ってるの！　嘉保家の一人娘よ！」

「あ」

この瞬間、僕の燈夜(ヒヨス)朱都市行きと、新しい携帯端末の購入は決定されたようなものだった。

携帯端末（後書き）

前々から思っていたのですが、どうやら笑う、という意味での面白い話を作るのは苦手なようですｏｒｚ
人を楽しくさせるってのは凄く難しくて大変なんですね…。勉強になります

Dawn

Ｄａｗｎ

窓の外で流れゆく風景、それは確かに三年前まで人が暮らしていた街の、なれの果てだった。

地上は今、三年前のテロ、そしてその後の世界規模の戦争で人間の住めない死の世界になっていた。

３００メートル上空を線路にそって飛ぶように走るリニアからは、捨てられた街の全景を見ることが出来た。

道路は荒れ果て、地上は無残に破壊されてはいるものの、ビルの上の階は昔の姿と変わらずそのままで、まるで街は人がまた帰ってくるのをずっと待っているかのようにみえた。

でも人はもうこの街に二度と戻る事はないだろう。僕は後方、その外見から松旺子（マツオウジ）と呼ばれる僕らの住む超高層都市を見やった

松旺子は都市その物の名前を言う。形がキノコの松旺子に似てい

たから自然とそう呼ばれるようになったとか。正式名称は他にあるらしいのだが、僕ら一般人は松旺子と呼んでいる。もしくはそのままキノコとか。

都市にはそれぞれ別の名前がついていて、僕らの住む都市の名前は秋桐（あさぎり）という名前だ。今向かっているジェノア社があるのが、燈夜（ヒヨス）朱で、それぞれが都市国家として名乗っている。

テロによる世界崩壊以前、既に国家の権力は地に落ちかけていた。そんな中で権力を手に入れだしたのが地方自治体だった。

地方自治体は国家から権力を奪い取り、都市国家としての姿を現し始めた。その一つとして地方による法律の発足及び自治部隊の設立、そして有力企業の抱き込みだった。

国が倒れた理由として大きな原因となったのが、世界中を襲った大不況だった。その為か、地方国家は近辺の有力企業をこれまでもかと抱き込み始め、企業は企業で国家の利を得ようと抗争を始めた。

その当時の話として［スクランブルウォーズ］と言う笑い話がある。実際にあった事なのかは分からないが、その話としては当時発足された法律に則って、サラリーマンが各々額に所属する勢力の鉢巻を巻いき、ケチャップや、トイレで汚物を流す為に使うラバーカップを片手に戦争をしていたというのだ。

勝てば相手の株を無条件で手に入れるなどという、本当かどうか分からない内容と、あまりに馬鹿らしい戦争方法がこれを笑い話とさせていた。

だが当時モラル厳格法と呼ばれる法律燈夜朱（ヒヨス）地域にあったのは事

実で、大変厳しいものだったらしい。それで一時期年間で万単位の逮捕者が出たとか、出なかったとか。

その後地方自治体の影響力も企業の力に飲まれ、実質企業戦争に勝ち残った二十の国家が日本を支配することになる。そしてテロが起きた後、建造されていた超高層都市の奪い合いでその数は十一にまで減った。即ち、三年前、一都市に一つの巨大企業と傘下の中小企業の構図が出来上がったのだ。

僕たちが住む都市秋桐(あさぎり)はその名の通り秋桐(あさぎり)企業が自治する都市国家で、主に生活用品の製造を行っている。

松王子の構造としては、キノコの傘にあたる部分が僕らの住む地域、それより下の地域にはリニアに乗るための通路以外一般人は立ち入ることが出来ない。僕が居住区以外に入ったのは秋桐に地上から他の人と一緒に移住する際、巨大なエレベーターに乗った時だけだ。その時だって巨大なエレベーター以外は何も見る事が出来ないまま乗せられた。

僕らがエレベーターから降りた時、目の前には地上よりも遥かに青い空と真新しい丸々一つの巨大な都市、そしてはるか下に見える地上だった。その地上も、今では外気から都市の環境を守るため、都市全体を覆うシールドで空以外見えなくなっていた。

美琴のお父さんの会社、嘉保コンツェルンが経営する農業プラン

トも各都市の居住区域より地下の何処かにあるのだろう。嘉保コンツェルンの経営する農業プラントは例外的に他の都市にも建設されている。生きる為に必要だからだ。その為、他の都市に対しても燈(ヒ)夜朱(ヨス)を管理するジェノア社は多少の影響力を持っている。嘉保コンツェルンがジェノア社と懇意にしているためだ。

「……で、だ。どうして俺が親父に会いに行くのにお前らも付いてくるんだ？」

滅多にこんな物は食べられないと、向い側のふかふかの豪華なデザインが彫られたソファーの上に胡坐をかいて、出された高級チョコレートを食い荒らす連司。その反対側、つまり僕の隣では、嘉保ブランドの高級ワイン（美琴様用特製ノンアルコール版）をちびちびと飲む琴美の姿があった。

「あら、誰のおかげでこのリニアに乗れたと思っているの？」

「うぐっ」

元々行きたかったわけじゃない。それでも僕の為にここまで色々手配してくれたのは美琴だ。それを判っていた僕は反論しなかった。

「で、おまえは？」

けどこいつは関係ねえ。

「あ？　そらお前、お前のお父さんに会えば何かしら良い事があるかもしれないじゃないか。それに元々近いうちに買いに行くつもりだったし」

「……お前帰れ。図々しくチョコ食ってないで今すぐ帰りやがれ」

「親友に対して酷い事いうね、咲。さっきのは冗談だよ。ただ単に俺が【マキ】に興味があるのと、その開発者である咲のお父さんに会ってみたいだけだよ。咲と一緒に行かないと次いつ会えるか判らないからね。」

ならちょっとは遠慮しろよ。このご時世、そのチョコいくらすると思ってるんだ？

それにしても……マキ？

「ねえ連司。マキって何よ？」

美琴も僕と同じ所が気になったようだ。美琴に先に言われてしまった。

「ん？　ああ。ＭＡＸＩＭＵＭって長いだろ。だから略してマキ。どうだ！中々良いセンスしてるだろ俺！」

そう言いながらもチョコを食い続ける連司。あ！　こいつもう箱にあったチョコの半分は食ってやがる。

僕は連司の膝上にあったチョコを箱ごと奪い取ると、自分の手元まで引き寄せた。

「マキってなあ。そんな可愛らしい名前にして、もし端末がゴツゴツしたようなデザインだったらどうするつもりだ？全く名前と合わないじゃないか」

箱からチョコを一つ摘み出して口に含む。な、なんと！口に入れた瞬間に広がるこの甘さ。かと言って甘すぎず苦すぎないこの絶妙なバランスに、直に溶けきらず、じんわりとけだして不意に、まるで電撃の様に程よい甘さの中に現れるこの芳しい嘉保家特産高級ワイン。ワイン味が口中に広がったときのチョコとワインとのコラボはまるでお城の舞踏会で踊る一組の初々しいカップルのよう！ああ、何て美味しいんだろう！

「…美琴、こいつまた暴走してるぞ。だから俺が咲が食う前に全部食ってやろうとしてたのに。美琴は自分の家のだから食いあきてるだろ？」

「あんたの場合ただ全部一人で食いたかっただけでしょ」

そう言ってため息をついた美琴。

「咲、帰って来なさい。そんなもので一々暴走しないの。チョコぐらいスーパーでも売ってるでしょうが。」

その一言で覚醒した。

「何言ってるんだ美琴！いまどき現地産カカオ豆にM．O．F．（国家最高職人）級のパティシエが作ったチョコが市場に出回るわけないだろ！」

そんな僕をみて、明らかに溜息をつく美琴。僕は少しムッとなった。

「だいたい美琴は！」

「あーはいはい、そうですね。私がバカでした。それより、ほら、そろそろ燈夜（ヒヨス）朱に着くわよ。」

そう言ってリニアの外を見つめる美琴。その先には秋桐とは比べようもないほど巨大な超高層都市、燈夜朱が迫って来ていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7231f/

A.Ｉの世界

2010年11月1日09時21分発行